

くすりの
現場から



File No.36

薬局セントラル ファーマシー長嶺 (熊本市)

「くすりのプロ」養成へ

薬局実務実習に注力

6年制薬学教育の導入に伴い、今年5月から薬学生長期実務実習がスタートした。4年制教育時代に行われていた2週間程度の実習と比べると、平均で薬局2・5ヵ月、病院2・5ヵ月という実習期間は格段に長い。「薬のプロ」を目指す卵たちにとっては、現場の最前線で医療人のイロハを頭と体に叩き込まれる日々が続く。

熊本県内で8店舗の調剤薬局を展開するハートフェルトは、薬局セントラルファーマシー長嶺で6月から地元熊本大薬学部の学生2人を受け入れた。旗艦薬局ということもあり、同薬局の取り組みは処方せん調剤に加え、緩和ケアを中心とする在宅業務、煎じ薬処方への対応、社内外での勉強会開催など多岐にわたり、実習の指導内容も幅広い。

実習の中でひとときわ力を入れてるのが学校薬剤師活動だ。地元の小中学校で行う薬物乱用防止教室（たばこ、アルコールを含む）に実習生を同行させ、実際に講師として壇上にも立たせている。

参加することが学びになる

「実習要項ではそこまで求められていないが、見るだけでなく、参加することで本当の学びになる」と経営者で薬剤師の稲葉一郎氏。7月に行った中学校での薬物乱用防止教室では、約300人の生徒を前に進行を任せた。自己紹介↓ビデオ上映↓講義↓実験↓まとめという流れで、ざっと時間は45分。実験ではミミズにニコチン液をかけ、その様子を観察させた。稲葉氏は実習生に対し、一方的に話すのではなく、質問を投げ掛



① 薬局セントラルファーマシー長嶺のスタッフ。左が経営者の稲葉一郎氏。右下の2人は実習中の薬学生②中学校の薬物乱用防止教室の様子。ミニスを使った実験に生徒たちも興味津々



③ 2階にある研修ルーム。壁面には学会で発表したポスターを貼り付けている④プライバシーに配慮した投薬ブース

実習ローテーションの改良も必要

頼もしい言葉に目を細める稲葉氏だが、今後は実務実習の効果をより高めるため、実習の進め方やローテーションの改良を検討すべきだと考えている。「1カ所の薬局にとどまらず、複数の薬局でさまざまな経験を積むことが望ましい。環境が変わることによっていろいろな人に接することができるし、環境順応能力も身に付く(稲葉氏)。ハートフェルトの運営する8店

け、生徒たちの反応や場の空気を見ながら進めていくよう指示。本番では緊張した面持ちながらも無事、大役を全うしたという。

初めて、学校薬剤師活動を体験した実習生の田上未和さんは「緊張したけど、とても楽しかった。質問した時の相手の同意とか、相づちをきちんと確認することなど、患者さんの服薬指導に生かせると感じる部分もあった」と手応えを感じた様子。もう1人の結城美里さんも、「実験で一気に生徒たちの反応がよくなった。印象に残ることをすると伝わりやすいということが分かった」と話す。

舗は、それぞれが立地、規模、処方せん応需診療科などで異なる特徴を持っており、この特性を生かした実習スケジュールを柔軟にデザインできないかという発想だ。

大学側との調整などにも必要なため、今のところ理想論の域を出ていないが、稲葉氏は「担当指導薬剤師が各実習薬局にできるだけ同行し、学生の評価基準を受け入れ薬局と事前に細かくすり合わせれば、最終評価にも齟齬(そこ)を来さず、実現できるのではないかと可能性を探っている。

学生に限らず、同社は以前から人の育成に力を注いできた。特に同薬局では2階にある研修ルームを活用し、定期的な社内勉強会や、周辺医療機関関係者との共同勉強会を開催。学会発表にも意欲的で、日本薬剤師会学術大会や九州山口薬学大会、日本緩和医療薬学会年会などには毎年参加している。病院薬剤師に比べて学会参加の少ない薬局薬剤師にも意識的にテーマを見つけて研究させ、人前で発表させることによって、スタッフレベルの底上げを図る狙いだ。

最後に、グループ旗艦店に位置付けられる同薬局には、ハード、ソフト両面で患者サービス充実の

工夫を随所に凝らしているのので、いくつか紹介しておきたい。

1つ目は投薬ブース。待合スペースの患者から見えにくい位置に出入り口を設け、ブース形状も斜めにカーブさせた仕切りを使うことで、外からの視線がさらに狭まるように工夫。個室に近いプライベートシーを確保した。

斜めにカーブした間仕切りに沿って長いすを設置しているのもポイントだ。薬剤師と患者は正対せず、患者が薬剤師を横に見ながら話す形となるが、これは対面よりも側面の方が心を開きやすく、しゃべりやすいという人間の心理的傾向を利用した仕掛け。同薬局管理薬剤師の天方奉子氏は、「最初は斜めに腰掛けて聞いていた患者さんが、正面に向き直ると、『あつ、興味を持ってるんだな』と心の動きが分かるなど、薬剤師

側も説明がしやすい」と話す。

2つ目は、2階に設けた仮眠室とバスルームなどの当直設備だ。今はまだほとんど使用していないが、「需要の高まりを見ながら、まずは夜間対応の強化から進め、将来は24時間対応にまで持っていきたい」（稲葉氏）と考えている。

このほかにも緩和ケア普及推進のための医療用麻薬の備蓄、無菌調製、選品からこだわる生薬調剤とそのため専任薬剤師の配置など、同薬局には「手間」の掛かる取り組みが多い。

しかし、稲葉氏は、「すべて患者さんのため。本当に必要なサービスや機能であれば、今は非採算で経営的に厳しくても、積極的に取り組む」と言い切る。手間をかけた分、大きな実りが得られると信じ、挑戦を続けていく覚悟だ。

（伊藤豊）



MEMO

【薬局セントラル ファーマシー長嶺】

熊本市長嶺南2-8-83。スタッフは薬剤師6人（うち常勤4人）、事務5人。約1400品目の医療用医薬品を備蓄し、月間1300～1400枚の処方せんを応需する。3階建ての大型施設で、1階に調剤室、待合室、投薬口、2階にクリーンルーム、研修ルーム、当直室。3階はハートフェルト本部。